

われわれの教育活動

2011 年度総括と 2012 年度方針

No.33

2012 年 4 月

一橋大学スポーツ科学研究室

われわれの教育活動

2011年度総括と2012年度方針

No.33

目次

はじめに	3
I. 2011年度の教育活動の成果と課題	4
A. 全学共通教育—カリキュラム編成と体制—	4
(1) 科目の編成	4
(2) 担当体制	4
(3) 教育活動の成果と課題	6
1) スポーツ方法Ⅰ	6
2) スポーツ方法Ⅱ	11
3) スポーツ科学・健康科学	15
4) 教養ゼミ	17
5) 教育社会学講義	18
B. 学部教育	19
(1) 学部講義	19
(2) 学部ゼミ	21
C. 大学院教育	23
(1) 大学院講義	23
(2) 大学院ゼミ	25
II. 教育条件の整備・拡充	27
III. 教育部活動	29
1. 実践交流会	29
2. 教育活動日誌	30
3. 調査活動	30
4. 教育部の活動・体制	31
IV. 2012年度教育活動の方針	32
1. 2011年度の達成と課題	32
2. 2011年度の基本方針	34

3. 2012 年度のカリキュラム編成と体制	35
4. 教育条件の整備・拡充	36
5. 運動施設利用に関する関係クラブ・サークルとの調整	36
6. カリキュラム開発・教育方法改善のための調査、研究	37
7. 教育部の活動	37

年間計画（案）

資料 1. 2011 年度時間割

2. 実践交流会（1）：「熱中症」をどう伝えるか（尾崎正峰）
3. 実践交流会（2）：APPLICATION FIELDS AND METHODOLOGY OF
COORDINATION TRAINING（ハラルド・ポルスター）
4. 「スポーツ方法Ⅰ」に関するアンケート調査用紙
5. 「スポーツ方法Ⅰ」に関するアンケート調査結果

はじめに

2011年3月11日の未曾有の大震災から1年が経過した。震災直後には、1年間の教育が無事に遂行できるかさえ不安であったが、われわれの教育がいかに平和な日常を前提として成り立っていたのかを実感させられた。それと同時に、震災時（非常時）の対応をどのようにするかという視点で、われわれの教育についてじっくりと見つめ直す機会となった。

これまで、われわれは、スポーツを実施する上でのリスクとその対処方法（怪我の予防・対処や熱中症の予防・対処等）について、スポーツ方法の授業での教材化に向けた取り組みを行ってはきたが、今回の大地震のような災害時の具体的対応等の取り組みはしてこなかった。震災後に大学としてまとめた「大地震に遭遇したときの対応」では、主に建物内での被災が想定されているが、教場の条件がさまざまに異なるスポーツ方法の授業では、被災時の対応もそれぞれの授業の場所に合わせた安全確保の方法を検討する必要があるだろう。震災後、新年度の授業は1ヵ月遅れの開始となった（4月分の授業は土曜日開講で対応）。

一方、今回の震災では多くの学校や公共の体育・運動施設が近隣住民や帰宅困難者の一時避難場所となった。今後、構想される新体育館には、教場としての視点、課外活動の拠点としての視点、福利厚生施設としての視点に合わせて、学生、教職員、近隣住民等の安全な一時避難場所としての視点も取り入れられなければならないであろう。既存の施設の整備を考える際にもそのような視点が必要となること——現在の体育館は果たしてこの用途に対応できるのだろうか——を震災は気づかせてくれた。

昨年度導入された「一定 GPA の卒業要件化」は、低 GPA が予測される学生への対応に多くの労力の投入が必要となっている。各学部、一学年で数十名もの対象者がおり、対応する教員・職員は非常に大変な思いをしている。われわれも昨年に引き続き、教育担当副学長からの要請を受け、成績不良が見込まれる学生の早期発見のための調査を実施した（スポーツ方法 I の受講生対象）。昨年の「はじめに」でも記したとおり、この制度において成績不良者の早期発見は非常に重要となることは理解できるが、制度導入によって教育の質の向上につながっているのかが実感されないまま仕事の量が増えるばかりでは、徒労感が増すのみである。ポジティブなデータが見いだせないならば、根本的な制度の見直しも必要となるであろう。

さて、41年間、運動文化科の助手を務めてこられた渡辺富子さんが、この3月末をもって定年を迎えられる。幸いなことに、渡辺さんには4月からの1年間は再雇用の特任助手としてわれわれのエリアの運営にご協力いただけることになっているが、小平での教育、そしてキャンパス統合後の運動文化科の教育活動の歴史を実際に知る存在が、あと1年でいなくなってしまうことは大きな痛手となる。この1年間は、これまでの先輩方の成果をみつめつつ、未来の教育について語りあいたいと考えている。今後とも学内・学外各方面からのご批判、ご教示をいただければ幸いである。

2012年3月 岡本 純也

I. 2011 年度の教育活動の成果と課題

A. 全学共通教育—カリキュラム編成と体制—

(1) 科目の編成

全学共通教育科目における運動文化科目の目的は、現代社会における健康やスポーツ・運動文化の重要性の高まりをふまえ、「入学後の学生の体力・健康の維持促進や技能の向上に留意しながら、健康やスポーツ・運動文化に関する科学的、総合的認識と高度な教養を身につけること」、そして「この文化領域を主体的に享受できるような能力の育成」がである。そのために、①スポーツ方法Ⅰ（必修科目・通年2単位）、②スポーツ方法Ⅱ（選択科目・半年1単位）、③スポーツ科学・健康科学（選択科目・半年2単位）、以上の3つの科目群を置いている。

(2) 担当体制

<運動文化科目の開講コマ>

全学共通教育科目における運動文化科目の開講コマ数は、2011年度は、昨年度と同様、通年コマに換算して45コマであった。その内訳は下記の通りである。

	2011 年度		2010 年度	
全学共通教育開講コマ	45	通年コマ	45	通年コマ
・方法Ⅰ	30	通年コマ	30	通年コマ
・方法Ⅱ	21	半年コマ	21	半年コマ
・健康・スポーツ科学	6	半年コマ	6	半年コマ
・教養ゼミ	3	半年コマ	3	半年コマ

<体制>

- ①専任は、引き続き早川後任の採用がなく、尾崎がサバティカルのため、5人体制となった。
- ②尾崎のサバティカル分は、非常勤講師を充てた。
- ③専任担当総コマ数は17.5コマ（3.5コマ/5人）。
- ④非常勤担当コマ総数は27.5コマ、運動文化科目開講コマ数に占める非常勤担当コマの割合は61.1%となった。

<種目別 2011 年度開講コマ数>

	スポーツ方法Ⅰ＝通年		スポーツ方法Ⅱ＝半年	
	2011 年度	2010 年度	2011 年度	2010 年度
テニス	8	6	6	6
バスケットボール	2	2	2	2
バドミントン	5	6	2	2

サッカー	3	5	2	2
バレーボール	3	3	—	-
ソフトボール	2	3	—	-
ジャズダンス	2	2	—	-
フライングディスク	2	1	2	2
スポーツフィットネス	1	1	—	-
オルタナティブスポーツ	1	—	—	-
体操	—	-	—	1
ゴルフ	—	-	2	2
古武術	—	-	1	1
ジョギング	—	-	1	1
ウォーキング	—	-	1	-
野球	—	-	—	1
ソフトラクロス	—	-	2	1
療育コース	1	1	—	-
	30	30	21	21

<2011年度の特徴>

- ① スポーツ方法Ⅰでは、テニスが6から8に、フライングディスクが2から3に増、バドミントンが6から5に、サッカーが5から3に、ソフトボールが3から2に減、オルタナティブスポーツを1新設した。
- ② スポーツ方法Ⅱでは、ソフトラクロスが1から2に増、器械体操と野球が1から0に減、ウォーキングを1新設した。
- ③ 種目定員を、スポーツ方法Ⅰのバスケットボールで36から40名に、フライングディスクで44から48名に変更した。
- ④ 非常勤講師担当種目は、担当コマ増によりスポーツ方法Ⅰの種目の追加（菊地：フライングディスク）、運動施設調整等により変更（森：バレーボールからテニスに、新村：バドミントンからバレーボールに）を依頼した。新規非常勤講師の長谷川氏にスポーツ方法Ⅱ（古武術）を、中村氏にスポーツ方法Ⅰ（テニス）、スポーツ方法Ⅱ（テニス）、スポーツ科学・健康科学（スポーツ文化）を依頼した。
- ⑤ 昨年度同様、スポーツ科学・健康科学は6コマ、教養ゼミは3コマ開講した。
- ⑥ 昨年度同様、月曜日が非常勤講師のみの授業日となった。
- ⑦ 東日本大震災による授業開始の遅れた分を特別授業日（5月21日（土）～7月16日（土）の毎週土曜日）の授業実施あるいは特別授業日代替措置（課題レポート）で補った。さらに半期15回分の授業を実施するために祭日である7月18日（月）および12月23日（金）にも授業を行なった。

(3) 教育活動の成果と課題

1) スポーツ方法 I

〈開講クラスと定員〉

曜日・時限	種目	定員
月・1	バドミントン	32
	テニス	42
	ソフトボール	44
月・2	ジャズダンス	40
	テニス	42
	ソフトボール	44
月・3	ジャズダンス	40
	バレーボール	40
	フライングディスク	48
火・1	バスケットボール	40
	サッカー	40
火・2	テニス	42
火・3	サッカー	40
	テニス	42
水・1	サッカー	40
	オルタナティブスポーツ	40
水・2	バドミントン	32
	テニス	42
	療育コース	—
木・1	テニス	42
	スポーツフィットネス	40
木・2	テニス	42
	バドミントン	32
木・3	バドミントン	32
金・1	バドミントン	32
	フライングディスク	48
金・2	バレーボール	40
	バスケットボール	40
金・3	バレーボール	40
	テニス	42
合計		1,160

〈学生および教員アンケートからみたスポーツ方法Ⅰの授業〉

今年度は、これまで実施してきた学生向けのアンケートの質問項目を大幅に変更して調査を実施し、受講生が何に満足し、何を不満とし、どのような改善を望んでいるのかといった点をよりリアルに把握しようと試みた。学生向けのアンケート調査の概要と調査結果の詳細については、Ⅲ-3を参照していただきたい。ここでは、その中から2011年度のスポーツ方法Ⅰの授業の成果と課題に関する主要な点を取り上げ、教員アンケートの結果や成績評価の実態等とつき合わせながら考えてみることにしたい。

(1)満足度

運動文化科では、1997年度より毎年全受講生を対象とした「スポーツ方法に関するアンケート」を実施し、授業の満足度について把握してきたが、今回の調査結果は、「大変満足」40.8%、「まあ満足」45.7%というものであり、両者を合わせると86.5%であった。これは、これまで最も高い数値であった昨年度の84.8%をさらに上回る数値である。ちなみに「ふつう」と答えた者は11.2%で、「やや不満」は1.8%、「大変不満」は0.4%にとどまっており、スポーツ方法Ⅰは、過去13年間で受講生から最も高い評価を獲得したことになる。

(2)何に満足しているのか

受講生は、スポーツ方法Ⅰの授業の何に満足しているのか？ 「受講してよかったと思う点」としてあげられているのは、①親しい仲間ができた（53.5%）、②健康や体力の維持・向上（44.6%）、③スポーツを楽しめた（43.4%）、④技術・練習方法の認識の深まり（30.9%）、⑤技術・技能の向上（28.9%）である。

とくに第1位にあげられている仲間づくりについては、スポーツ方法の授業の大半が、1クラスをさらに10人以下の小さなグループに分け、それを基礎に1年間授業を展開していくというグループ学習の形態で進められていることの成果であろう。また、第2位の健康や体力の維持・向上は、学生にとっての運動の機会が十分確保されておらず、（とくに体育会やスポーツ系の同好会に所属していない学生にとって）スポーツ方法Ⅰがその重要な機会となっていることを物語っているといえよう。

(3)成績評価

上記のような学生の満足度の高さは、昨年度も指摘したように、担当教員の成績評価の高さと相関関係にあるとあっていいだろう。2011年度のスポーツ方法Ⅰの成績は、全体で1,060人中、Aが452名（42.6%）、Bが387名（36.5%）、Cが138名（13.0%）、Dが33名（3.1%）、Fが50名（4.7%）であった。AとBが合わせて79.1%、約8割に達しているが、これはスポーツ方法Ⅰの授業が、担当教員の側からみて、かなり高い成果をあげているということを示すものである。

教員アンケートには、それを裏づける報告が多く記されている。「キンボールの楽しみを知った者が中心になって、学年末にはサークルを立ち上げることとなった」というスポーツフィットネスの授業もそのひとつである。また、「野球もソフトボールも未経験で、野球やソフトボールのゲームをTVでも一度も観たことがないという留学生（男子）」に同チームの野球経験者が専属コーチを買って出ってくれ、

冬学期の後半、残り 2 ゲームとなった日に、彼がセカンドを守った際、初めて上手くゴロを処理しアウトを取った。その瞬間、学生達からは大歓声が上がり、チームメイトとともにコーチ役の学生が「すごく感動した！」と満足感を語ってくれた。彼に技術を教えることで、チームが結束し、後半徐々に勝利を重ねる良いチーム形成へと繋がった。

というソフトボールの授業などは、集団づくりのダイナミズムを示す一例である。

なお、スポーツ方法 I における A 評価取得者数は、「A・B・C 評価取得者の 3 分の 1 以下とする」というガイドラインの基準を超えるものであるが、この点については昨年度も指摘したとおり、スポーツ方法の授業の大半が、1 クラスをさらに 10 人以下の小さなグループに分け、それを基礎に 1 年間授業を展開していくというグループ学習の形態で進められていることをふまえて評価がなされるべきである。われわれとしては、現在、ゼミナールや 20 名未満の授業に対して適用がなされているガイドラインの除外規定を、スポーツ方法にも適用すべきであると考えている。

(4) 学生の不満

では、学生が不満を感じている点は何か（「とくにない」と答えた者は 356 人で 41.6%であった）。

第 1 位は電算機抽選（34.0%）、第 2 位は種目の数や内容（15.5%）、第 3 位は成績評価の方法（10.5%）、第 4 位は受講者間の技術・ニーズの差（10.3%）である。

電算機抽選の実際は、第 1 希望のクラスを受講できた者が全体の 69.8%、第 2 希望が 11.8%、第 3 希望以下が 18.4%というものである。抽選によって希望するクラスを受講できなかった者ほど不満が高く、「たいへん満足」と答えた者は、第 1 希望のクラスを受講できた者が 45.2%、第 2 希望が 36.5%、第 3 希望以下が 27.6 と明確な差が出ている。また当然ながら、希望するクラスを受講できなかった者ほど電算機抽選に対する不満が強い。担当教員の側からみれば、電算機抽選で落とされ、不本意ながら受講する者が 3 割いるという状況で授業を行っているのである。

今回、授業で使用したスポーツ施設については、別に項目を設けて満足度について聞いてみた。その結果は、「大変満足」が 8.8%、「まあ満足」25.3%、「ふつう」が 55.1%、「やや不満」が 8.7%、「大変不満」が 2.2%である。授業の満足度に比べると、施設に対する満足度は非常に低いと言わざるを得ない。とくに不満度が高いのは、屋外のコートを使用しているバレーボールであり、その 19.1%が「やや不満」、8.2%が「大変不満」と計 27.3%の者が不満を表明している。屋外でのバレーボールの実施は、授業で使用できる体育館が一つしかなく、それもバレーボールコート 1 面分しか取れないという屋内施設の貧困さゆえのやむを得ざる措置であり、学生たちの不満ももっともである。今どき屋外でバレーボールの授業をしている大学など聞いたことがない。

不満の第 2 位が、種目の数や内容であったが、それはこうした施設状況による制約と課外活動との関係で 4 限目が使えないという制約によるところが大きい。繰り返し指摘してきたように、小平キャンパスからの移転・統合は、スポーツ施設に関しては未だ完成していない。早急な解決が必要である。

不満の第 3 位にあがっている成績評価の方法であるが、これはアンケートの質問項目にも明

記した「出席 7 割以上」という単位認定の条件に対する不満が大半ではないかと推定される。第 4 位の受講者間の技術・ニーズの差は、教員サイドを悩ましている問題でもあり、先のソフトボールの事例に示されているとおり担当教員によるさまざまな取り組みがなされているところである。

(5) 半期科目化および 4 限開講に対する学生の要望

今回のアンケートでは、スポーツ方法 I の半期科目化および 4 限開講に対する要望も聞いてみた。半期科目化についての回答は、①通年のままでいい (37.3%)、②半期科目に変更すべき (32.1%)、③どちらでもいい (30.6%) というものであった。②の半期科目に変更すべきと回答した学生の人数は、285 人である。

こうした結果は、教員側の意見ともほぼ一致している。つまり、確かに通年であるがゆえに集団づくりや技術の習熟（とくにほぼ全員が初心者であるフライングディスク等）などで成果をあげている面があるが、その一方で、種目によっては、半期で終了して別の種目を選ぶようにした方が、学生のモチベーションを維持するうえでも、また、再履修する学生にとってもよいのではないかと、といった意見もある。今後、一部の種目の半期科目化の可能性について検討していくべきであろう。

4 限開講についての回答は、①現在のままでいい (36.0%)、②4 限目を開講すべき (22.4%)、③どちらでもいい (41.7%) というものであった。4 限開講すべきと回答した学生の人数は 199 人であり、こちらも無視することはできない。その多くが体育会等に所属していない学生だと推測されるが、彼/彼女らにとって 4 限目開講は吉報にちがいない。その可能性についても検討していくべきであろう。

(6) 教員による改善の取り組み

①**新種目の実施** 学生たちの不満の第 2 位が、種目の数や内容であったが、この点については、施設や開講時間の面で大きな制約を受けつつも、担当教員による創意工夫が毎年試みられている。種目でいえば、今年度は、複数の種目を実施する「オルタナティブスポーツ」を立ち上げた。これは、「普段気軽に行うことが難しいコンタクトスポーツを簡素化した種目（タグラグビー、フラッグフットボール、ソフトラクロス）とバスケットの類似種目としてネットボールをとりあげ、各 4～6 回にわたって行なう」というものである。さらに来年度は、「ウォーキング&ジョギング」を新たに開講する。

②**集団づくりやチームビルディング** 授業の内容や運用等の面でもさまざまな取り組みがなされているが、集団づくりやチームビルディングという点では、「夏学期は 5～6 人グループで、冬学期は 12～14 人グループでチームを固定してグループワークの形式で授業」を行ったサッカー、「夏学期はグループ学習の方法に慣れること」に重点を置いたというテニス、また、「チーム活動への教員介入の必要性」を指摘するソフトボールの授業実践が注目される。ソフトボールの担当教員はその理由について以下のように述べている。

例年通り、チーム編成は野球・ソフトボール経験者と未経験者が各チーム均等になるよう、また学部がなるべく偏らないよう考慮して行ったが、なるべく目立つことは避けたい、

キャプテンになったがどのようにリーダーシップを取ってよいかわからない、経験者であっても自分さえ授業に出席し単位を貰えればいいとの考えでチーム運営やキャプテンに非協力的な学生が昨年までより多かったためか？なかなかチーム内のコミュニケーションや練習等がこれまでよりうまく進行しなかった。

学生の自主性を重視し、しばらく様子を見てみたが、夏学期の後半になってもうまく機能しないチームがあったため、チーム練習に教員が入り、キャプテンの存在意義を強調したり、経験者がうまく未経験者へ指導できるよう導いた。

これまでより、学生同士のコミュニケーションやチーム作りに教員がより積極的に介入しないといけないと感じた年度であった。

リーダーシップの養成は大学全体の理念とも呼応する教育課題であるが、残念ながらその困難性が年々増大しているというのが実情ではないだろうか。グループ学習における学生の自主性と教員の主導性のバランスの難しさは従来より議論されてきたところだが、教員の主導性をより強めるというのも、今求められているひとつの方法であろう。

③必修科目として教えるべき知識 この点では、下記のスポーツフィットネスの授業が、昨年度の熱中症の講義（テニス）と同様、ひとつの手がかりとなるように思われる。

座った生活中心の受験生から活動的な大学生へ、家族との暮らしから一人暮らしへ。大学1年の時期は彼ら・彼女らの生活が大きく変わる時期である。そのよう1年間に身体データを測定しながら自分の身体や生活を見直す作業を行うことは、授業担当者が思うよりも彼ら・彼女ら自身にとって重要な意味を持つのかもしれないと、期末の個人レポート（個人のデータをまとめて今後の健康維持・向上について述べさせる）、グループレポート（グループワークのまとめ）を読んで思った。

自分自身の関するデータを取るという授業実践は、講義「運動と体力の科学」でも行われており、そこでは「(1) 1週間当たりの食品種数調査、(2) タイムスタディによる1日のエネルギー消費量調査、(3) 1日の摂取カロリー調査」の3種のデータを用いている。自分で測定した自分自身に関するデータによって、自分の身体や生活を見直す作業やそれらを通して得る知識は、必修科目としての重みに応えるだけの内容を持っているといえるのではないだろうか。

「ここ数年の夏の猛暑を考えると、梅雨明け以降の実技のあり方を再考する必要があると思う」（テニス）といった指摘とも合わせて、上記のような身体や健康に関する授業を実施していくことを全体で考えていくべきではないだろうか。つまり、講義を組み込んだスポーツ方法Ⅰの授業についての検討である。

④その他の工夫 未経験者やスポーツが苦手な学生へのきめ細かな対応、レディー斯拉ールやローカルルールの導入（ソフトボール）、教員と学生のコミュニケーションのためのメールや写真の活用（スポーツフィットネス）、用具をホームベース付近に放置すること等の危険性を1コマ分使って教えた授業（ソフトボール）、授業評価を出席率、スキルテスト、チームプレイ能力、ウェブでの知識テスト、以上の4種で行なっているバスケットボール/サッカーの授業など、さまざまな工夫がなされている。

（坂上康博）

2) スポーツ方法Ⅱ

〈夏学期の開講クラスと履修者数〉

曜日・時限	種目	定員	履修者
火・1	テニス	30	15
火・2	サッカー・フットサル	34	18
	バスケットボール	32	21
火・3	ウォーキング	30	30
	ソフトラクロス	30	13
水・1	テニス	30	23
木・3	テニス	30	20
金・1	テニス	30	24
金・2	ゴルフ	20	20
	フライングディスク	30	20
金・3	バドミントン	32	32
合計		328	236

〈冬学期の開講クラスと履修者数〉

曜日・時限	種目	定員	履修者
火・2	サッカー・フットサル	34	26
	バドミントン	32	33
火・3	ジョギング	30	30
	ソフトラクロス	30	12
水・1	テニス	30	25
水・2	古武術	20	20
金・1	テニス	30	34
金・2	ゴルフ	20	20
	フライングディスク	30	29
金・3	バスケットボール	32	38
合計		288	267

スポーツ方法Ⅱは、夏学期に8種目、計11クラス、冬学期に9種目、計10クラスを開講した。登録者数は、夏学期が236名、冬学期が267名、計503名であった。スポーツ方法Ⅱの受講者数は、2004年度の621名をピークとして、2005年度537名、2006年度450名、2007年度485名、2008年度360名、2009年度396名、2010年度は421名と減少傾向にあったが、2011年度は6年ぶりに履修登録者の合計が500人を超えた。冬学期の増加数はほぼ人気種目であるジョギングの開講で説明がつく一方、夏学期についてはほぼ全ての科目で3割から10割の受講者数の増加がみられることが特徴である。

開講種目の充足率がおしなべて高く改善傾向にあることから、学生の需要を満たす方向に改善がなされていると見てよいだろう。スポーツ方法Ⅰで出会った友人関係がスポーツ方法Ⅱを通じて維持されている例も観察された。

「スポーツ方法に関するアンケート」のなかで、スポーツ方法Ⅱの履修希望についても聞いているが、そこでもここ数年希望者の減少が見られ、2011年度のアンケートで、「ぜひ履修したい」と答えた者の比率は8.5%（前年度比-0.8%）、「時間帯が合えば履修したい」16.9%（-4.5%）、「やりたい種目があれば履修したい」18.1%（-0.4%）となっている。これらを合計すると43.5%（-5.7%）で、前年に比べ若干の現象がみられるもののスポーツ方法Ⅱの潜在的な需要は依然として決して低くはない。

スポーツ方法Ⅱの履修を希望しない理由（複数回答）として、第1位が「単位数が少ない」55.4%、第2位が「他の科目を優先する」45.6%、第3位が「クラブ等の活動で十分」19.8%となっている。スポーツ活動自体に対する需要よりも、全体的な履修計画上の理由が上位を占めていることが分かる。来年度開講予定9種目に対して履修希望にも偏りはみられなかった。

こうした現状を見据えつつ、さしあたりわれわれが成し得ることは、潜在的な需要をとらえて参加をさらに促すこと、冬学期の長期欠席者への対応等も含めて引き続き魅力ある授業を追究していくことであろう。

なお、授業の概要や個々の教員の工夫や努力等については、以下の教員アンケートを見ていただきたい。（鈴木直文）

〈授業に関するアンケート（2011年度）より〉

◇坂上康博

①スポーツ方法Ⅱ（サッカー・フットサ：火2夏）

出席者は毎回14名程度。したがって、ハーフ・コートを使って7対7程度のゲームを実施することができた。これは、3年目にしてはじめてのことで、授業も活気あるものとなった。

授業のに関する連絡をメールで行ない、4年生が多いことから記念写真の撮影を3度ほど行なった。

②スポーツ方法Ⅱ（バドミントン：火2冬）

受講希望者が多く、抽選の結果受講登録者が定員の32名となったが、一度も出席しなかった者が9名（4年8名、3年1名）いた。1～3年生は出席が非常によかった。

全体を4班に分けたうえで、練習は1・2班、3・4班の合同で、経験者をリーダーに指名して実施した。11月までは、このような形式の30分程度の練習を隔週で実施した。それ以外の週は、15分程度の自由練習の後、ペアを組んで、全体でトーナメントあるいはリーグ戦で試合を実施した。

リピーターが多く、受講生の多くが知り合い同士で仲が良く、用具の準備や片付けなどを含めて、スムーズな運営がなされた。

◇岡本純也

①スポーツ方法Ⅱ（フライングディスク：金2夏）

②スポーツ方法Ⅱ（フライングディスク：金2冬）

例年のように夏学期・冬学期ともに経験者と初心者の割合は5：5程度であり、経験者による指導があるので初心者の技術習得も早く進んだ。この授業でもチームを固定し、グループノ

ートを活用した学習を入れたいと思っているが、人数がなかなかそろわず（継続的に 30 名を超える受講生が望ましい）に叶わないでいる。方法Ⅰのフライングディスクのクラスが増えたので、来年度には受講生が増えてグループ学習が実現して欲しいと願っている。

◇坂なつこ

①スポーツ方法Ⅱ（バドミントン：金 3 夏）

2つのグループを固定し、練習および対抗戦としてゲームを行った（ミックスダブルス）。経験者が体系だった指導をしてくれた。

②スポーツ方法Ⅱ（バスケットボール：金 3 冬）

グループを4つ作ることができた。水曜1限に授業を行っていたときよりも、格段に出席率が高く、4グループを維持できたのは画期的であった。ただ、就活や資格試験などで、3年生でも欠席が続くケースが多く、経験者が多いのでゲームを楽しむ分には問題ないが、練習は継続的にすることは困難であると感じた。

1名の交流学生（中国）が参加した（単位にはならない）。

◇鈴木直文

①スポーツ方法Ⅱ（ソフトラクロス：火 3 夏）

昨年度よりも本格的な指導を導入し、夏学期中に大幅なレベルアップが見られた。

②スポーツ方法Ⅱ（ソフトラクロス：火 3 冬）

夏学期と同様に、水準を高くおいて指導した。夏学期からの継続受講者が2名いた。

◇中澤篤史

①スポーツ方法Ⅱ（ウォーキング：火 3 夏）

グループごとに地図を見てウォーキングコースを考案し、国立市街を歩いた。学生もたのしく授業に参加していたようで、今後も継続したい。

②スポーツ方法Ⅱ（ジョギング：火 3 冬）

グループごとに地図を見てジョギングコースを考案し、国立市街を走った。学生もたのしく授業に参加していたようで、今後も継続したい。

◇青沼裕之

①スポーツ方法Ⅱ（テニス：水 1 夏）

②スポーツ方法Ⅱ（テニス：水 1 冬）

方法Ⅱの冬学期の授業は受講登録した学生の半数以上が出席不良となり、特に4年生がそうであり、グループ学習が困難でした。しかし、出席する学生は夏学期も冬学期も非常に熱心であり、班長とグループノート担当者のもとで機能的に練習を進めてくれました。授業そのものは教員としても非常に楽しかったです。方法Ⅱの学生の技術習得要求は高いので、とにかく懇

切丁寧に練習の内容と方法を提示して、学生とともに検証していく授業が望まれると思います。4年生は就職試験や卒業論文作成で忙しく、授業出席が安定しないことは今後も続くでしょうから、この点を念頭においた班分けと学習展開を来年度も行っていく必要があるでしょう。

◇Polster

①スポーツ方法Ⅱ（バスケットボール：火2夏）

A very normal Basketball Sports 2 class, with a bit less students. Because of that, we have played sometimes only 4 x 4 men Basketball. There has been also a gap between advanced and less-skilled players, which interrupted the flow of the game from time to time. However, all students took effort to make the game enjoyable.

There has been 1 student from Taiwan, who was leg-injured (knee) from the beginning. The injury happened some month before. From his doctor he has got “green light” to take part in sports classes. However, it appeared to be not a good idea, since he “tumbled” through the game. He really wanted to take Basketball; - nevertheless I recommended him to change the class content, since Basketball is a very intense load especially for the knee joint. The student still tried 3 times to take part, but was always sidelined after some minutes. Finally, he quit the class.

From the year 2010 new international Basketball rules has been decided, which are caused from new court design. So far I did not use the taped new lines at the Hitotsubashi Gymnasium for practice. I just made students aware of the new rules. Because the new rules are part of my closing “Web-Knowledge-Test”, students are forced to study the new points of FIBA ruling.

②スポーツ方法Ⅱ（サッカー・フットサル：火2冬）

This winter semester soccer class brought up again a good number of enrolled students. As usually, not all students made it until the last class; some students just came to play not considering getting credit for the participation. Although a “Futsal Soccer Class” - we were able to play 2 times the whole soccer field, since the number of students where appropriate. Some enrolled students asked for bringing their friends in, which I allow usually, if the friends are students of Hitotsubashi University and they are able to cover any possible injury by themselves.

I spent less time for basic technique drills, since almost every student demonstrated excellent soccer skills. However, we did some challenging exercise: Volley-Soccer, pair-passing game, 4- goal game and target-zone shooting.

Some students have been visited Germany already. Thus, we could also exchange our cultural experiences.

◇鬼丸正明

①スポーツ方法Ⅱ（テニス：木3夏）

登録者 20 名、単位取得者 15 名。全欠 1 名。単位外出席 4 名。

初心者が 5 名登録したが、うち 2 人（男女各 1 名）だけ出席。初心者にとってはやりづらい授業になったかもしれない。上級者グループは例年通り自主運営、初級者グループはゲーム戦術を想定しての練習。学期後半は上級者・初級者同士のペアをつくり、ゲーム。グループ間の交流をはかる（初心者グループは初級者グループとペアを組みゲームを行った）。全員の協力を得られ、順調にいったように思う。

◇柴崎涼一

①スポーツ方法Ⅱ（テニス：金 1 夏）

この学期もほとんどがテニス経験者でしたので実践を中心に授業を進めました。一限目ですので全体的に出席はあまりよくありませんでしたが、その日に参加した受講者は熱心にやってくれました。

②スポーツ方法Ⅱ（テニス：金 1 冬）

冬学期は実技のできない日が数回ありましたので、実践に役立つような試合のビデオを用意して対応しました。サークル所属者がほとんどでしたので、今のテニスのトレンドなどを話し合いながら見ました。その後のコートでの授業にも活かせたと思います。

③スポーツ方法Ⅱ（ゴルフ：金 2 夏）

普通のショットの他に、アプローチ、パター、バンカーショットなどを交えて、色々と工夫しながら授業を進めました。最後まで残った学生は少なくなりましたが、それなりにゴルフの楽しさは伝えられたつもりです。

④スポーツ方法Ⅱ（ゴルフ：金 2 冬）

今回も単位取得者は少なくなりましたが、最後まで残った学生は、外のゴルフ練習場での授業も含めて十分に楽しんでくれたようです。

3) スポーツ科学・健康科学

2011 年度は、ヒューマンセクソロジー、地域社会とスポーツ、スポーツ文化、運動と体力の科学、スポーツと映像文化、以上計 5 科目を開講し、受講者数は計 1,159 名であった。それぞれの授業については、以下の教員アンケートを見ていただきたい。

学期	曜日・時限	科目名	担当者	登録者数
夏	火・2	ヒューマンセクソロジー	村瀬	242
	木・2	地域社会とスポーツ	鈴木	373
冬	水・2	スポーツ文化	中村	89
	木・2	運動と体力の科学	渡辺	94
	木・3	スポーツと映像文化	鬼丸	361
合計				1,159

〈授業に関するアンケート（2011年度）より〉

■地域社会とスポーツ（木2：夏）鈴木直文

スポーツと都市の社会・経済・文化との関係について、スタジアム開発、宗教・民族・暴力、メガイベントなどの視点から、様々な事例を扱った。370人の履修者があった。授業ではワークシートを配布して、個人やグループで作業をしてもらうことを通じて講義の理解を深める方式を取り、一定の効果が感じられた。

■ヒューマンセクソロジー（火2：夏）村瀬幸浩

夏学期のことなので、記憶は薄らいでいますが、勉強のために聴講した恵泉女学園大学非常勤の方の感想レポートにもあるように、とても熱心に受講し退室時にひと言「ありがとうございました」という学生が何人もいました。とても講義しがいのある授業だったとの印象が強いです。

■スポーツ文化（水2：冬）中村哲也

履修者89名、単位取得者は78名であり、全体の出席率は77.2%であった。本授業では、学生にとって身近な存在である「メディアスポーツ」と「学生スポーツ」という大きく2つのテーマを設定し、それぞれに関するスポーツ史およびスポーツ社会学の研究を具体的に紹介する形で授業を展開した。

また、本授業では学生の要望に応じて講義資料と配布資料をwebclassにアップして、学生が復習の際に利用できるようにした。13回の講義の総閲覧数は778名で、1回平均59.8名がwebclassを利用していることから、学生が講義内容を復習したり、テスト勉強を行う際に大いに活用されたものと推測される。今後も講義を担当することがあれば、webclassを積極的に活用していきたいと思った。

また、毎回出席をかねてコメントペーパーを配布したが、熱心に受講している学生からは、講義の内容を自分の経験や問題関心に引き付けて、優れた内容のコメントや質問が寄せられ、講義担当者として考えさせられることも多かった。他の学校での講義の経験と照らし合わせても、一橋の学生のレベルの高さを感じることができ、私にとっても有意義な経験となった。

■スポーツと映像文化（木3：冬）鬼丸正明

登録者361名、単位取得者349名。W1名。

本年も抽選実施。抽選合格者のうち登録しない者が予想より多く、70名以上いた。

授業は通年通り。

■運動と体力の科学（木2：冬）渡辺雅之

基本的には昨年度のリポートであったが、学生のコメントに応じて内容修正をかけながら実施した。

今期の特徴は、3種の調査に対して理解度が高かったことである。3種の調査とは、(1)1週間当たりの食品種数調査、(2)タイムスタディによる1日のエネルギー消費量調査、(3)1日の摂取カロリー調査であった。どれも自分自身のデータをとることであるが、これまでは

提出が目的かのような記載や分析が目立っていたが、今期は自身のふり返りを示す記述がほとんどであった。健康問題がかなり意識されてきている印象であった。

実践的な話題が多いためか、実用性と言うことで評価されている印象がある。その一方で、スポーツを自身のライフスタイルの中でどのように位置づけるかの考察をしたものもあり、講義のねらいが浸透しているなあ、との実感もあった。

4) 教養ゼミ

〈授業に関するアンケート（2011年度）より〉

●教養ゼミ（水2：夏）岡本純也

テーマ：観光とは何か

前半にはテキスト（山下晋司編著『観光文化学』新曜社,2007年）を2章ずつ輪読し、後半には個人レポートのテーマについて検討を行った。今年度から4年生まで受講できるようになったのでこれまでと異なる展開が期待されたが、残念ながら受講生は2年生までであった。期末に提出されたレポートのテーマは以下の通り。レポート集にまとめることは時間が無くてできなかったのは残念である。

「ご当地 B 級グルメの興りとこれから」

「韓国の観光戦略 ―韓流と観光―」

「富山の持続可能な観光の取り組みについて」

「東日本大震災における被災地・東北地方の観光の変容」

「観光資源としての B 級グルメの可能性―富士宮やきそばを例に考える」

「世界を日本に呼び込む Cool Japan」

「観光開発の問題」

「芸術祭と観光による地域振興」

「観光型スポーツツーリズムについて」

「東京ディズニーリゾート成功の理由」

●教養ゼミ（木3：冬）坂 なつこ

テーマ：文化を社会的視点から捉える

履修者は1年2名、2年2名の計4名。すべて社会学部。

『定着者と部外者』（N. エリアス）および『親密性の変容』（A. ギデンス）を輪読した。

人数が少ないので、履修生と話し合い、文献を選択した。社会学部生であるため、社会的な問題にあたるときには、他の授業も参照しながらスムーズに議論ができた。

●教養ゼミ（火2：冬）鈴木直文

テーマ：「楽しいこと」で世界を変える

ソーシャルビジネス、BOP、フェアトレード、ファンディング等をキーワードに、「楽しさ」の要素がどのように社会問題の解決につながるのかをテーマに行った。28人の受講者があり、ワールドカフェ方式を取り入れたグループ討議やグループ発表を中心に進めた。

●教養ゼミ（火2：夏）中澤篤史

テーマ：障害者スポーツを知る・見る・考える

本授業は、文献で障害者スポーツを知ることから始め、東京都多摩障害者スポーツセンターで実際の様子を見学し、それを権利・福祉・リハビリテーション・自立生活・文化の視点から考えようとした。具体的な進め方は次の通り。

1. 知る：高橋明『障害者とスポーツ』の講読
2. 見る：東京都多摩障害者スポーツセンターの見学
3. 権利の視点から考える：長瀬修・東俊裕・川島聡編『障害者の権利条約と日本』の講読
4. 福祉の視点から考える：佐藤久夫・小澤温『障害者福祉の世界』の講読
5. リハビリの視点から考える：大川弥生『新しいリハビリテーション』の講読
6. 自立生活の視点から考える：DeJong, G., "Independent Living"の講読
7. 文化の視点から考える：木村晴美・市田泰弘「ろう文化宣言」の講読

5) 教育社会学講義

〈授業に関するアンケート（2011年度）より〉

■教育と社会 中澤篤史（金2・夏）

履修人数：338名

本講義は、教育と社会の関係を多様な観点から考える、教育社会学エリア担当教員によるオムニバス講義である。中澤が担当した2回分の内容は、次の通りである。

◆身体と教育①：遺伝がすべてを決めるのか？

1. 「身体と教育」を論じるということ：諸科学の中の人間と身体
2. 遺伝がすべてを決めるのか？：遺伝決定論の再考
3. 身体教育の構想：われわれは、どのように身体教育を構想すべきか

◆身体と教育②：学校体育からリハビリテーションまで

1. 教科体育：なぜ学校に体育の授業があるのか
2. 運動部活動：スポーツと教育はどう結びつくのか
3. 社会体育：身体は誰にとってなぜ大切なのか
4. リハビリテーション：障害児者・高齢者に身体教育は何ができるか

追記：この他に同講義のまとめとして、担当教員全員が一同に会して、「教育の公共性を考える」をテーマとした、ミニシンポジウムを行った。

B. 学部教育

(1) 学部講義

2011年度は、4つの講義を担当した。各講義については、以下の教員アンケートを参照されたい。

〈授業に関するアンケート（2011年度）より〉

■社会学部講義・スポーツ社会学の基礎 鈴木直文、坂上康博、坂なつこ（月3・冬）

履修人数：349名

【概要】

本講義では、スポーツとそれに関わる社会現象を社会科学の視点から考察した。普段自明なものとして受け止め、無意識のうちに活動したり、見たりしているスポーツという現象を、社会科学の対象として認識し、分析することが目標。多様なスポーツに関わる事例を取り上げ、担当教員がそれぞれ①国際開発、②歴史学、③社会学の理論やモデル、分析視点、手法などを用いて読み解いていくこととした。

【授業計画】

10/3 ガイダンス(担当:鈴木、坂上、坂)

(10/10 体育の日)

①「スポーツを国際開発的にとらえる」(担当:鈴木)

10/17 HIV/AIDS 啓発とスポーツ 事例①:Kick4Life

10/24 ミレニアム開発目標とスポーツ 事例②:UNOSDP

10/31 スラム問題とスポーツ 事例③:MYSA

11/7 メガスポーツイベントと社会開発 事例④:Dream Goal 2010

②「スポーツを歴史的にとらえる」(担当:坂上)

11/14 「世界のスポーツとその母国、英米スポーツ比較」

11/21 「イギリスにおける近代スポーツの誕生」

11/28 「アメリカにおける近代スポーツの改造と創造」

12/5 「オーストラリアから考える近代スポーツの歴史ーオーストラリアン・フットボール考」

③「スポーツを社会的にとらえる」(担当:坂)

12/12 遊びからスポーツへ

12/19 スポーツと文明化

12/26 ビデオ教材視聴:「熱闘 7000人〜これがサッカーのルーツだ!」

1/16 ジェンダー、マスキュリニティ

1/23 ナショナリズム、グローバリゼーション

1/30 試験

【評価方法と基準】

平常点またはレポート(各教員 25%×3=75%) + 試験(25%)で評価した。試験は、上の3テーマから各1問を出題し、全問に回答。

■社会学部講義・身体と教育 中澤篤史（月 2・冬）

履修人数：61名

本講義では、身体と社会のつながりを、教育の観点から考えた。

社会が成立するためには、個人の身体のあり方を、意図的に方向付けてまとめる必要がある。その役割を担うのが、広い意味での教育である。では個人の身体は、教育を通じて、どのように社会へつながるのか。逆に、社会は、教育を通じて、どのように個人の身体を規定するのか。遺伝・心身・発達・体育・スポーツ・特別支援教育・労働・障害・リハビリテーションなどをキーワードとして、身体-教育-社会の三者関係を理解することを目指した。具体的な進め方は次の通り。

1. 遺伝：教育には何ができるのか
2. 心身：ココロとカラダは誰のものか
3. 発達：ヒトはどのように人になるのか
4. 体育：なぜ学校に教科体育があるのか
5. ディベート：「スポ方 I」は必修であるべきか
6. スポーツ：スポーツは教育になるのか
7. 特別支援教育：何が「特別」なのか
8. 労働：働き疲れた身体を誰が癒すのか
9. フィールドワーク：国立市にどんなスポーツ施設があるのか
10. 障害：障害とは何か
11. リハビリテーション：障害にどう向き合うか
12. まとめ：身体を教育するとは、どういうことか

■社会学部講義・社会研究の世界 鈴木直文（水 1・夏）

履修人数：約 250名

オムニバス講義の 1 回を担当した。「スポーツで社会はよくなるか？」をテーマに、イギリス都市貧困地域のコミュニティ再生へのスポーツの利用の事例を、社会的排除／包摂の理論と絡めて講義した。猪飼先生の講義との関連性が強かったので、学生にとっては社会的排除／包摂に関する理解を深めることに役立ったようである。

■商学部講義・スポーツビジネス論 岡本純也（金 4・冬）

登録人数：74名

今年度は「経営資源としてのスポーツ」というテーマを設定し、スポーツがこれまでどのように利用・活用されてきたのか、現在、どのように利用・活用されているのかについて理論面・実務面からアプローチした。スポーツ・ビジネスの特徴・構造、歴史に関しては、主に岡本が担当し、実務に関しては外部講師を招いて講義していただくという形式をとった。外部講師の講義テーマは以下の通り。

「スポーツツーリズムによる地域の活性化」

「スポーツ流通業の戦略」

「地域イベントの拡大化戦略」

「地方銀行のスポーツ支援と地域活性化」

「アメリカのマイナーリーグ、独立リーグにおけるスポーツ・ビジネス」

「開発途上国の支援とスポーツ」

期末には以下のテーマのレポートを課したが、出席率も高い授業であったため、熱心に取り組んだレポートが多かった。

期末課題：

「企業」、「NPO」、「地域」などの中から任意の研究対象を一つ選び、現在の課題を分析し、その課題を解決するための方策として「スポーツという資源」をどのように活用すればよいか、講義の内容を踏まえながら論じよ。

(2) 学部ゼミ

各ゼミの間の交流を図るため、昨年度に引き続き夏学期に社会学部および商学部の5ゼミによる合同研究発表会および懇親会を実施した(6月15日)。冬学期には、立命館大学(京都衣笠キャンパス)で、中央大早川ゼミ、尚美大早川ゼミ、立命館大川口ゼミ、権ゼミ、一橋大坂ゼミ、坂上ゼミ、尾崎ゼミ、岡本ゼミが参加して合同ゼミを開催した(12月17日~18日、約90名が参加)。研究発表、全体レクリエーション、懇親会等を行った。なお、11月21日には坂上ゼミと鈴木ゼミの学生有志が、小平の如水スポーツプラザのアリーナでレクリエーションを実施し、バスケやフットサルを行った。これらの企画は、学生たちの個々の研究にとっても、また、企画運営力を鍛えるといった面や交流などの点で刺激的であり、教育的な効果が大きく、継続的な開催を追求すべきである。

各ゼミの内容は以下の教員アンケートを参照されたい。

(鈴木直文)

〈授業に関するアンケート(2011年度)より〉

●社会学部ゼミ 尾崎正峰(木4・5)

履修：4年2名

講義テーマ：現代社会におけるスポーツ事象の歴史的・社会的背景、および形成過程について。今年度は、サバティカル取得年度のため、3年ゼミの応募は行わなかった。4年ゼミでは、地域調査についての検討、卒業論文の作成へ向けての検討を行った。12月に立命館大学で開催された各大学のスポーツ関連ゼミの「合同ゼミ」に2人とも参加、発表を行った。なお、地域調査については、調査対象(川崎市のスポーツ担当部局)との日程調整がつかず、来年度に実施を見送ることになった(調査の主担当の学生は、来年度も在籍するので)。

●社会学部ゼミ 坂上康博(月4・5)

テーマ：「スポーツと大衆文化の変化をとらえる」

履修人数：8名(3年生3名、4年生5名)

5月には岡本ゼミとのBBQ、7月にはスポーツ社会学講座での合同ゼミ、11月には如水スポーツプラザで鈴木ゼミとのレク、12月には立命館で開催された合同ゼミ(一橋・立命館・中央・

尚美大学)に参加し、また、この間にゼミコンパを実施するなど、かなり活発な活動を展開することができ、親睦も深めることができた。

毎週のゼミは各自の卒論に向けての個人発表。4年生の卒論は、10月10日が第1次、11月14日が第2次、1月11日が第3次の締切とし、第3次で提出された原稿について面談を実施した。このような関所を設けて執筆を促したが、なかなかスピードが上がらなかった。

秋から就職活動が始まったが、欠席は少なく、3年生は1月に8,000字レポートを書いてこれまでの各自の研究をまとめ、卒論の土台をつくった。

卒論は、ウェブ上で後輩も読めるようにする予定である。また、3月には卒業旅行として上海に行く予定である。

●社会学部ゼミ 坂なつこ (木 4・5)

講義テーマ：スポーツ・レジャー社会学の文献輪読および卒論指導

履修人数：4名 (+院生1名)

今年はいじめて、4,5限をゼミとし、3,4年生に院生を加えて行うようにした。

もともと人数も少ないので、多方面からの議論ができるようになった。3年生にとっては卒論や就活を意識する機会も増え、よい刺激になったように思う。また、院生も加わったことで議論を深めることができた。

●社会学部ゼミ 鈴木直文 (月 4・5)

講義テーマ：楽しいこと×社会問題解決

履修人数：16名

昨年度に引き続き、「楽しさ」の要素がどのように様々な社会問題の解決に貢献しうるか、というテーマで事例研究を中心に行った。今年度から社会調査士資格認定のためのG科目に指定されたため、3年生は調査実習の準備、実施、分析、報告書作成に大半の時間を割いた。グループワークを中心に行い、相互学習が効果的に行われた。4年生は卒論指導を中心に行い、皆が足並みを揃えるように配慮して一定の効果がみられた。

●社会学部ゼミ 中澤篤史 (月 5・夏)

テーマ：身体を考える

履修人数：3名

本ゼミナールでは、〈身体教育〉＝「身体のあり方に対する意図的な働きかけ」を、多様な立場と方法論から総合的に考えることを目的としている。研究領域・対象・テーマは、大きく次の3つのPartに分けられる。

[Part1. 身体教育の原理と思想]

テーマ：身体論、遺伝と環境、生命技術と生命倫理、体育思想の系譜、障害学、老年学、優生思想と遺伝決定論、当事者主権とパターンリズム

[Part2. 学校における身体の諸問題]

テーマ：発育・発達、運動と人間形成、スポーツと教育、教科体育・運動部活動、肢体不自由児教育・特別支援教育、知育・徳育・体育論

[Part3. 福祉における身体の諸問題]

テーマ：障害者福祉・高齢者福祉、リハビリテーション、介護、ケア、障害者スポーツ、自立生活運動、医療と福祉、健康・疾病・障害・老化

本年度のゼミは、4年生と3年生を分けて行った。4年生1名については、卒業論文執筆に向けた、問いの立て方・方法論・調査・分析・考察の指導を行った（論文題目：「可愛くなった」生徒たちのこれから）。3年生2名については、「身体を考える」というテーマで、ジング『遺伝と環境』、湯浅泰雄『身体論』、フーコー『狂気の歴史』、フーコー『言葉と物』（第一部）を講読した。（大学院ゼミと合同で開催。）

●商学部ゼミ 岡本純也（木4・5）

履修人数：14名（4年5名、3年9名）

今年度は学内・学外のゼミとの交流機会が多かった。まず、笹川スポーツ財団が主催する Sport Policy for Japan という、政策提言をゼミ間で競い合う学生会議に3年生が参加した。この会は、今年度から開始され、運営も発表者も学部3年生が行うという企画であった（11大学19チームが参加）。私のゼミからは3年生が2チームに分かれて参加したが、学識経験者、スポーツ・ジャーナリスト、政治家らの審査による賞を獲得ところまではいかなかった。しかしながら、10月1・2日に開催されたこの会への参加が彼らを成長させ、冬学期のゼミへの取り組みは明らかに例年に比べ主体的なものとなった。このような教育的な効果は、一つのゼミの活動の中ではなかなか出しにくく、今後も3年生には参加を奨励したいと考えている。

一方で、夏学期に行われた学内のスポーツ社会学のゼミとの交流、冬学期に行われた立命館大学、中央大学、尚美学園大学、一橋大学のスポーツを専門とするゼミとの交流は、大勢の前での発表の機会の経験という意味では貴重な機会となるが、交流を深化させるという意味ではもう少し工夫が必要であるように思われた。

C. 大学院教育

（1）大学院講義

〈授業に関するアンケート（2011年度）より〉

■大学院講義・身体社会史（学部・大学院共修科目） 坂上康博（木3・冬）

講義テーマ：スポーツの社会史

履修人数：10名（3年生3名、4年生4名、修士2名、博士1名）

今年度は、「スポーツの社会史」をテーマとし、①文献についての報告・ディスカッション、②各自が興味・関心をもったテーマについての個人報告・ディスカッション、この2つを柱に進めた。

①文献については、日本だけでなく、諸外国のスポーツの発展過程を扱った歴史学および歴史社会学的な研究書や論文を取り上げ、その中から最も関心がある文献を、国・地域・時代・スポーツの種目等に関する各自の興味関心に照らし合わせて選ぶ。そして、それらの内容や研究方法などを吟味して報告する。②個人報告では、それらの文献をふまえて、また、各自の研

究に引きつけながらテーマを設定し、追究したものを自由に報告するようにした。

文献の報告は、下記のとおり。

①	10月13日	各自が取り上げる文献と日程の決定。
②	20日	・後藤建生『日本サッカー史 代表編』不双葉社、2002年 ・多木浩二『スポーツを考える—身体・資本・ナショナリズム』ちくま新書、1995年
③	27日	・リチャード・ホルト「アマチュアリズムとイングリッシュ・ジェントルマン—スポーツ文化の分析—」『体育史研究』第27号、2010年 ・川口智久「スポーツ文化の形成—アメリカにおける国民スポーツ〈ナショナルゲームとしてのフットボール〉の形成過程をめぐって—」、影山健編『国民スポーツ文化』大修館書店、1977年
④	11月10日	・トニー・メイソン他『フットボールの歴史』講談社、2004年 ・坂上康博編『海を渡った柔術と柔道』青弓社、2010年
⑤	17日	・松井良明『ボクシングはなぜ合法化されたのか—英国スポーツの近代史』平凡社、2007年 ・坂上康博『権力装置としてのスポーツ—帝国日本の国家戦略』講談社、1998年
⑥	24日	・坂上康博「剣道の近代化とその底流—三本勝負を中心に—」、中村敏雄編『日本文化の独自性』創文企画、1998年 ・ジョルジュ・ヴィガレロ、リチャード・ホルト「鍛えられた身体—十九世紀の体操・運動選手」『身体の歴史』Ⅱ巻（19世紀）、第9章

12月1日～1月22日は、自由テーマによる発表を実施した。

この授業は、院生と学部3年生以上が受講できる兼修科目だが、院生と学生の間でのニーズや意欲の違いが大きく、院生のレベルで授業を進めることが困難であった。

■大学院講義 国際スポーツ論 鈴木直文（水2・夏）

履修人数：4名

昨年度に引き続きスポーツと都市の関係について、世界の諸都市の事例の英語文献講読を通じて、経済・文化・宗教・コミュニティ等の視点から学習させた。前半は教員が用意した基本文献を全員で読み、後半は受講者が選んだ論文を皆で読んだ。後半に受講者が探して来たものは論文の質が低い傾向にあったことが改善点である。

■大学院講義 身体教育論 中澤篤史（火2・冬）

講義テーマ：障害学・再考

履修人数：1名

障害学（Disability Studies）とは、これまで医療・福祉・教育の対象としてネガティブに捉えられてきた障害・障害者を、社会・文化の観点からポジティブに捉え返そうとする試みである。障害学は、パターンリズムの批判や障害の社会的構築過程の分析を通じて、障害を「問題」

から「文化」へと転換させ、障害者の自由と権利を守ろうとする点に意義があった。しかし、その反面で、障害者自身の決定と選択を強調する余り、そうした決定と選択の能力を持たない場合はどうするのか、一切の介入を完全に否定してよいのか、といった課題も残されている。そこで本授業では、代表的文献である、安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也『増補改訂版 生の技法』、立岩真也『私的所有論』、星加良司『障害とは何か』、杉野昭博『障害学』を講読しながら、障害学の意義と課題を再考することを目指した。

なお、本授業は、大学院ゼミと連動して開催した。

(2) 大学院ゼミ

〈授業に関するアンケート (2011 年度) より〉

●大学院ゼミ 尾崎正峰 (木 1)

履修人数：1名

スポーツ社会学に関する内外の研究動向について意見交換を行った。また、博士論文、学会誌への投稿論文についての検討を行った。

●大学院ゼミ 坂上康博 (月 2)

講義テーマ：「日本の近現代を中心としたスポーツの社会史」

履修人数：7名

受講生の都合に合わせて、実際には木曜 4～6 限に開講した。

上記の 7 名の他、他大学の院生等 4 名、その他修了生 2 名も随時参加。

ゼミの内容は、各自の研究報告と討論。今年度も、研究報告時間の短縮のため、資料をあらかじめ添付ファイルで全員に送付し、事前に読んでくるようにした。

ゼミの人数が多く、発表機会が少ないため、今年度はスポーツ関係の院生だけで自主ゼミ(スポーツゼミ)を立ち上げ、毎週金曜 2 限に実施した(参加者 6 名)。夏学期は主に英語文献の検討を中心にし、冬学期からは個人報告を中心に進めた。

7月の本学スポーツ科学研究室の定例研究会で、ゼミテン 4 名全員が報告し、12月のスポーツ史学会には、2人の院生が参加し、1名が研究発表を行なった。1月のスポーツ文化研究会には、3名の院生が参加した。また、秋に日本スポーツ社会学会の研究委員会企画学生フォーラム世話人に2名が選出され、同フォーラム「選別装置としてのスポーツ」(3月18日開催予定)の企画運営や定例研究会等に参加している。

●大学院ゼミ 坂なつこ (木 2)

講義テーマ：N. エリアスの文明化論

履修人数：3名 (+外部 1名)

外部からの1名を加え、4名で行った。『文明化の過程』を読みながら、各人の修士論文構想、博士論文構想発表などを間に挟み、関連する英語や日本語の論文を読んだ。

●大学院ゼミ 鈴木直文 (木 4)

講義テーマ：社会科学の哲学、方法論、社会正義論

履修人数：4名

受講者全てが副ゼミとしての履修であり、研究関心や領域のばらつきが大きかったが、社会科学の基礎体力作りとして方法論や社会科学の哲学、社会哲学の古典や基本文献を輪読した。選んだ文献は、Pawson & Terry の Realistic Evaluation、Hollis の The Philosophy of Social Science、Sen の Inequality Reexamined、Popper の Discovery of Scientific Logic。また、受講者の研究進捗の報告も併せて行った。

●大学院ゼミ 中澤篤史 (月 3)

テーマ：体育思想の系譜／障害学・再考

履修人数：4名

本ゼミナールでは、〈身体教育〉＝「身体のある方に対する意図的な働きかけ」を、多様な立場と方法論から総合的に考えることを目的としている。研究領域・対象・テーマは、大きく次の3つのPartに分けられる。

[Part1. 身体教育の原理と思想]

テーマ：身体論、遺伝と環境、生命技術と生命倫理、体育思想の系譜、障害学、老年学、優生思想と遺伝決定論、当事者主権とパターンリズム

[Part2. 学校における身体の諸問題]

テーマ：発育・発達、運動と人間形成、スポーツと教育、教科体育・運動部活動、肢体不自由児教育・特別支援教育、知育・徳育・体育論

[Part3. 福祉における身体の諸問題]

テーマ：障害者福祉・高齢者福祉、リハビリテーション、介護、ケア、障害者スポーツ、自立生活運動、医療と福祉、健康・疾病・障害・老化

本年度のゼミは、文献講読と個人研究発表で構成した。文献講読は、夏学期に「体育思想の系譜」をテーマにして、貝原益軒『養生訓』、カント『教育学講義』、グーツムーツ『青少年の体育』を講読し、冬学期に「障害学・再考」をテーマに大学院講義と連動して、安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也『増補改訂版 生の技法』、立岩真也『私的所有論』、星加良司『障害とは何か』、杉野昭博『障害学』を講読した。個人研究発表は、それぞれの関心に沿って行い、問いが魅力的か、方法論が適切か、データの扱いが妥当かなどを論点にして議論した。

●大学院ゼミ 岡本純也 (木 3)

履修人数：2名

博士課程の院生が主ゼミで1名、修士課程の院生がサブゼミで1名。それぞれが博士論文・修士論文に取り組み、両者ともに学位取得にこぎ着けた。

インテグレーション後、スポーツ産業論のゼミとしては博士号の学位取得者は初となる。サブゼミで経営戦略論（加藤俊彦教授）のゼミに参加し、そこで大いに力をつけたことが学位取得につながったと考えている。

II. 教育条件の整備・拡充

施設の改善を中心とした教育環境の充実は、2011年度においても引き続き課題であり、体育館の増改築、陸上競技場フィールドの整備を中心に関係各所との協力の上で進めていく努力を行った。同時に、東日本大震災や大型の台風に見舞われた今年度は、自然災害への備えとしての運動施設の役割も焦点化された。全学的に安全で安心な教育環境を整えていくために、運動文化科としても積極的に貢献していくべきであろう。

(1) 体育館増改築要求

今年度の主な進展は次の通り。

- ① 新空手道場が硬式野球場奥のエリアに新設される。新体育館建設のための用地を旧空手道場のエリアを含めて検討できる余地が確保された。但し予算の関係で旧空手道場の取り壊しの予定は立っていない。
- ② 「課外活動施設等検討WG」が発足したが、実質的な進展はなかった。同WGは、運動スポーツ施設を含む国立・小平両キャンパスの利用を検討するもので、全体計画の中では小平キャンパスが優先的な検討対象と考えられている様子である。

体育館の改築が全キャンパス計画の中に位置づけられることは当然といえ、運動文化科としてもそれを踏まえた対応を考えていく必要がある。

(2) 陸上競技場フィールドの整備

昨年度安全性の面で大きな問題になった陸上競技場フィールドについて、一定の改善があった。

6月初めに男子ラグロス部が対外試合を行うにあたり、部員がボランティアで土入れを行ってくれた。これによりかなり表面の凹凸が改善された。

H23年度大学戦略推進経費に申請したが採択されず、施設課の緊急営繕経費による整備が行われることになった。一回の整備で平らにすることは難しく、3年かけて徐々に平らにしていこう方針になった。

関連して、陸上部OBの寄付によるトラックの全天候化案が検討されている。併せてフィールド部分の改修も行う可能性も考えられ、暑熱対策などスポーツ方法の授業環境という視点から同計画にも関与していくことが望ましい。

(3) 運動スポーツ施設使用を巡る学生との協議・調整

例年通り、課外活動との運動施設利用調整会議を12月13日におこなった。呼びかけた15団体中7団体が参加した。各団体との質疑の内容は次の通り。

- ・ キャノン（授業中のテニスオムニコート内のゴミの片付け）
- ・ 陸上競技部（学内外者の使用の問題：走り高跳びのマットなど、全天候型トラック整備）

計画あり)

- ・ バスケットボール部 (新ルールコートライン整備有難い、床が滑って困る)

(4) その他の運動施設等の整備

体育館

- ・ 体育館窓ガラスの破損修理 (2011年9月21日台風被害) (2011年9月22日実施)
- ・ 体育館から 武道場への扉修理 (2011年9月29日実施)
- ・ 体育館及び運動文化教員室プレハブの排水工事 (2011年10月31日、11月2日実施)
- ・ フロアー照明の配電盤ブレーカー交換工事 (2011年11月29日実施)
- ・ バスケットボール1面、バドミントン2面コートライン整備 (2012年1月31日～2月5日実施)
- ・ 体育館北側防球ネット取換え (2012年3月6日実施)

屋外施設

- ・ 陸上フィールド整備 (ラクロス部2011年5月31日、6月1日実施)
- ・ テニスコート内、樹木の白い虫 (エノキワタアブラムシ) 駆除 (2011年6月10日実施)
- ・ ゴルフ練習場での花火のあと発見 (2011年7月22日)
- ・ テニスクレイコート・バレーコート整備 (2011年8月8日～30日実施)
- ・ 陸上フィールド草刈り (1回目2011年7月6日実施:2回目2011年9月29日実施)
- ・ 硬式野球場周辺草刈り (2011年9月26日実施)
- ・ テニスコート出入口扉 (2011年9月21日台風被害) の取換え工事 (2011年10月26日実施)
- ・ 陸上フィールド整備 (2012年3月19～27日実施)

テニスコート周辺の木の剪定依頼 (2010.11.15-未)

教務課から施設課へ連絡済み、H23年度4月再申請予定 (2011年2月16日教務課確認)

教員室設備関連

- ・ 地デジ対応テレビモニター設置 (2011年9月12日)
- ・ DVD書棚 (2011年12月20日)

(5) 運動文化教員室の火災報知器設置について

昨年度から要請している運動文化教員室への火災報知器の設置について、大きな進展は無かった。5月には業者による見積もりが行われたが、床面積が法定基準以下であるという理由から設置が見送られた。常勤・非常勤を含めた教職員の安全の観点から、今後も要請を続けていく。

(6) 災害時の運動施設の役割

東日本大震災を契機につきつけられた課題もある。運動施設の災害時の役割である。

第一に、東テニスコートと陸上フィールドがそれぞれ東西キャンパスの緊急避難場所に指

定された。陸上フィールドはともかく、東テニスコートは平常時に施錠されている上、避難時の人の動線が十分確保されているとは言い難く、対策が必要である。学生支援課の責任範囲ではあるが、各施設の状況を最もよく把握している運動文化として貢献する責任があるだろう。

第二に、自然災害時の休講措置を定めたガイドラインの中で、課外活動についても同ガイドラインに準拠することが定められた。9月の台風の際、体育館2階の窓ガラスが割れて落下する事故があったが、同日体育会バスケットボール部が体育館で通常通り練習を行っていた事実があった。学生の安全のために、同ガイドラインの運用が適切になされることを期待したい。

第三に、体育館を避難所として利用する場合に備え、災害倉庫が設置されることになった。しかしながら、収容力、安全性等の面で、避難所としての設備は非常に貧弱であると言わざるを得ない。前述した台風時に窓ガラスが割れる事故のようなことが、市民の避難中に起これば大惨事となる。このことは、施設改築要求の中でも強く主張すべき点であろう。

(7) 今後の課題

教育環境の根幹となる運動施設の改善については、今年度は大きな進展は無かったものの、空手道場の移設、陸上フィールドの改善など、望ましい方向への変化もあった。今後も大きな予算措置が期待しにくい状況が続くと考えられ、地道な改善活動を継続していくとともに、現実的な方策を執行部との調整を通じて模索していくことも必要であろう。

(鈴木直文)

Ⅲ. 教育部活動

1. 実践交流会

(1) 「熱中症」をどう伝えるか

報告：尾崎正峰（2011年5月31日：スポーツ科学研究室）

本報告は、一昨年（2010年）の7月に実施した授業の概要と、そこに至るまでの背景等について述べたものである（巻末に資料掲載）。

最近、ゴールデンウィーク明けから気温が非常に高く、7月になると30度を優に超すことが多くなってきている。年度末の教員アンケートでも、こうした環境の中で実技を実施することについての検討の必要性が指摘されている。交流会では、教員間でこの課題に対する問題意識とそれぞれの経験を共有することをねらいとした。

報告者は、気温（平均、および最高）が高くなってきたことが体感された時期（世紀の変わり目頃）以降、スポーツ方法Ⅰの授業において、オリエンテーションでの伝達等、随時、熱中症に対して注意を喚起してきた。2010年7月、35度を超す状況になった際、実技を中止し、教室で熱中症についての講義を行った。体育会、サークルなどで活動している学生を中心に反響は大きかったが、学期末のレポートにおいてもこの講義に対する評価は高かった。

(尾崎正峰)

(2) 「コーディネーショントレーニング」

報告：ハラルド・ポルスター（2011年6月21日：運動文化教員室、体育館）

ポルスター氏がこれまで研究され、ナショナルチームのコーチとして、また本学の非常勤講師等として指導されてきた「コーディネーショントレーニング」について、その歴史、適用分野、効果、コーディネート能力のシステム、原則などを簡潔に報告していただいた。

「コーディネーショントレーニング」は、スポーツに必要な精妙で複雑な動きを効率的に身につける方法として、ドイツなどで取り入れられ、さまざまな種目で大きな効果をあげているにもかかわらず、日本での知名度は高いとは言えない。われわれ教員も、この日のポルスター氏の報告を聞き、氏の指導の下で実際にやってみて、“コーディネートする能力”の重要性というものにはじめて気づかされた次第である。今後も授業に導入していくために各種目での具体的な練習方法などの検討に努めていきたい。

巻末資料は、実践交流会において、ポルスター・ハラルド氏が報告された内容をご本人に要約していただいたものである。

なお、原文はドイツ語であったが、より多くの方に読んでいただきたいということで、無理を言って英訳していただいた。われわれの申し出を快く受け入れてくださったポルスター氏に改めてお礼を申し上げたい。

（坂上康博）

2. 教育活動日誌

- 2011/04/01 教育部会①（新年度顔合わせ会打ち合わせ） *新年度顔合わせ会
- 04/22 教育部会②（スポーツ方法Ⅰ・Ⅱの受付・履修状況、健康上理由ある学生の面接状況、講義・教養ゼミの受講生、特別授業期間及び休日の授業開講予定、実践交流会計画について）
- 05/31 実践交流会（熱中症対策：尾崎正峰）
- 06/21 実践交流会（コーディネーショントレーニング：ハラルド・ポルスター）
- 09/29 教育部会③（来年度カリキュラム、実践交流会について、来年度以降の助手の体制と業務の見直しについて）
- 10/18 教育部会④（スポーツ方法Ⅱの受付状況、来年度カリキュラムについて）
- 12/13 運動施設利用調整会議
- 2012/01/24 教育部会⑤（教育活動目次及び分担、「スポーツ方法アンケート」、教員へのアンケートについて、全学共通教育FD及び常勤・非常勤講師会合について、新年度顔合わせ会、施設整備関連）
- 2012/03/06 教育活動の総括と方針会議

3. 調査活動

今年度も、スポーツ方法Ⅰの受講生に対して、運動文化科として独自のアンケート調査を実施した。

このアンケートは、年度末に行われる教育活動の総括のための議論の基礎資料として大きな意味を持ってきたが、今回は、質問項目について検討を行い、授業のための学内のスポーツ施

設の改善、今後のカリキュラム編成等に資するために、いくつかの項目の新設、統合等の変更を加えた（下記、および、巻末資料参照）。

アンケート結果の概要と特徴については、巻末の資料、および、前述の「教育活動の成果と課題」を参照。

なお、これまで実施してきたスポーツ方法Ⅱの受講生に対するアンケート調査は、アンケートの目的、質問項目等についてのさらなる議論が必要であるとの判断から、今年度は実施しなかった。

スポーツ方法Ⅰに関するアンケート

- ・対象：スポーツ方法Ⅰの受講生（登録者数：1,062名）
- ・実施期間：2012年1月の各授業時間内
- ・有効回答数：892

☆質問項目の変更について

主な変更点は以下のものであった。

- 1) 受講している授業の「選択希望順」（新設）
- 2) これまで個別に質問項目として立てていた、授業を通して「親しい仲間ができた」、「体力の維持・向上に役立った」などの点を「受講してよかった点」の選択肢に統合（変更）
- 3) 「施設の満足度」（新設）
- 4) 「開講ターム（通年、半期）の希望」（新設）
- 5) 「4時限目開講の希望」（新設）
- 6) 「不満な点」（新設）（従来までの自由記述の項目を残しつつ、選択肢をあげる形）

（尾崎正峰）

4. 教育部の活動・体制

本年度の体制は、坂上（部長）、鈴木、中澤、関根（庶務）であった。なお、室長（岡本）も教育部会に出席した。教育部の活動については、活動日誌参照。

IV. 2012 年度教育活動の方針

1. 2011 年度の達成と課題

【2011年度の基本方針】

- 1) 引き続き、早川後任人事の実現に向けて取り組む。
- 2) 全学共通教育、学部、大学院それぞれの講義科目の再編成に向けて引き続き検討し、具体化を進める。
- 3) スポーツ方法の開講形態、内容、方法、評価、アンケート調査等について引き続き検討し、改革をはかる。
- 4) 「課外活動施設等検討ワーキンググループ」を通して、体育館の増改築を含めたスポーツエリアの整備・充実について、より具体的なプラン（概算要求によらない予算措置の可能性等も含む）を作っていくこと、およびそれに向けた情報収集や調査活動を開始する。
- 5) 熱中症対策や休日の授業における事故対策をふくめて、安全安心な教育環境の整備に向けて、関係部署との協議等を進めていく。
- 6) 引き続き、長期欠席者・見学者の実態把握につとめ、関係部署と連携し、対策を検討する。
- 7) GPA制度の本格導入にともなう学生の履修行動の変化等についての実態把握につとめる。

上記のような 2011 年度の基本方針にそって、それぞれの達成状況と課題について総括していきたい。

(1) 早川後任人事

昨年に引き続き、運動文化科会議の議題にあげて年間を通して追及したが、候補者を見出すことができなかった。

(2) カリキュラム改革、講義科目の再編成

①**担当授業の全貌の把握** 昨年度に引き続き、全体をにらんだ改革を実施していくために、全学共通教育、学部、大学院のすべての担当を一覧化して授業の全貌をつかむよう努めた。

②**全学共通教育講義科目** 本学におけるスポーツ関係の講義科目は、まず共通教育からスタートしたという歴史的な経緯および1人1科目という担当体制によって担われてきたこと等から、スタッフが大きく入れ替わった現在、学部専門科目との整合性等もふまえた全体的な見直しが求められている。

こうした理解に立って、2011 年度には、新たに赴任した鈴木を独自に立てず、尾崎の担当科目と同じ「地域社会とスポーツ」という名称で実施した。

今年度の検討課題としてあげられていた、①内容的な違いがわかりにくい「現代社会とスポーツ」と「現代スポーツ論」の名称の再考、②それも含めて講義科目を教養科目にふさわしい

名称と内容のものに改編すること、③複数担当制等への移行については、ふみ込んだ検討ができなかった。

③学部・大学院講義科目 社会学部・社会学研究科の専門講義科目についても、見直しが求められている。その理由は、昨年度確認したとおり、第1に、共通教育の講義科目の見直しが学部科目とも連動すること、それとも関連して、第2に、新たなスタッフの特性および近年のスポーツ社会学等の動向をふまえたカリキュラムの再考が必要であること、第3に、授業負担の軽減をはかる必要性である。最後の点は、スタッフ全員が共通教育科目を一人当たり通年で3コマ以上担当しているという量的な面とともに、「スポーツ社会学の基礎」「身体社会史」「スポーツ問題の社会学」「スポーツと社会過程」の4つの学部科目、および「国際スポーツ論」「地域スポーツ論」の2つの大学院科目、以上計6つの科目の担当者を固定せず、4人による交代制で運営していることによるところも大きい。

こうした点をふまえて、2011年度には、①「スポーツ社会学の基礎」を3名のスタッフで担当することにした。②他の科目の担当者についても、できるだけ固定化する方向で考え、それぞれの名称・内容・担当者・開講頻度等の検討を、GPA制度もふまえつつ進めたが、結論を得るには至らなかった。すでに大学院商学研究科では、2009年度より「スポーツイベント論」「メディアスポーツ論」を廃止し、「スポーツマネジメント」に一本化しているが、社会学研究科の科目を検討する際には、こうした経緯や上書き履修制度等も視野に入れる必要がある。

他方、2011年度は、『社会学研究科履修ガイド』のスポーツ社会学領域の原稿を全面改定し、その作業を通して、本学におけるスポーツ社会学の位置や学問的な特徴などを明確化した。また、大学院の受験生をターゲットとしたスポーツ科学研究室のポスターを作成し、合わせてホームページをリニューアルしたが、これらもわれわれのスポーツ研究の特徴等を再考するいい機会となった。

(3) スポーツ方法やアンケート調査等の改革

スポーツ方法については、昨年度決定した改革案（月曜の開講コマの削減、新種目の導入、定員の変更）を実施した。また、2012年度の改革案（新種目の導入、定員の変更）を決定した。4限目の開講については、運動部との調整が必要であることから、さしあたり2011年度の運動施設利用調整会議の場で、その可能性についてアナウンスを行った。

アンケート調査については、①スポーツ方法Ⅱのアンケート調査を中止し、②スポーツ方法Ⅰについては、質問項目について大幅な見直しを行なった上で実施した。なお、これらのアンケート調査に関しては、実施の必要性や目的、調査内容、集計方法、集計結果の分析の時期などをめぐってさまざまな意見が出された。引き続き検討が必要である。

(4) 体育館の増改築を含めたスポーツエリアの整備・充実

この点についての2011年度の取り組みは、Ⅱの「教育条件の整備・拡充」で述べたとおりである。2010年度末に新たに施設マネジメント委員会の下に立ち上げられた「課外活動施設等検討ワーキンググループ」を通して、体育館の増改築を含めたスポーツエリアの整備・充実についてのより具体的なプランを提出していくことを2011年度の課題としたが、上記ワーキングが始動しなかったため進展がなかった。引き続き情報収集や調査活動を独自に行なっていく

必要性がある。

(5) 熱中症対策等を含めた安全安心な教育環境の整備に向けて

2011年5月31日に熱中症に関する学習会を開催した。

2012年2月22日に開催された第72回安全衛生委員会(委員坂上・渡辺)で議論になったAEDの設置場所と使用方法の学生への周知方法に関して、その具体化について検討を開始した。

(6) 長期欠席者等の実態把握とその対策

昨年度に引き続き2011年度も、これまで運動文化科で取り組んできた長期欠席者に対する対応を、GPA制度の下で問題がある学生の早期発見の取り組みに連動させて行なった。6月と11月の2度にわたって、「スポーツ方法I」の担当教員に照会し、長期欠席者をリストアップし、全学のGPA制度の検討ワーキングに提出した。われわれとしては、GPA制度を実施していくうえでの重要なシステムづくりへの貢献にとどまらず、これまでめざしてきた「運動文化科として対応していく体制」についても、ひきつづき検討していかなければならない。

他方、発達障害者支援法により、発達障害者に対する教育上の配慮が大学の義務となり、本学においても取り組みがなされている。スポーツ方法Iでは、「療育コース」がその受け皿となると思われるが、具体的なケースに対応しながら理解を深め、さらに検討を重ねていく必要があるだろう。

(7) GPA制度による学生の履修行動の変化等についての実態把握

GPA制度が学生の履修行動にどのような変化を与えるのか、という問題については、全学共通教育専門委員会・学部教育専門委員会を中心に全学レベルで情報の収集と検討がなされてきているが、スポーツ方法をはじめとする全科目で、さまざまな変化が起きると予想される。変化の把握と検討が引き続き必要である。

GPA制度に関して、2011年度より「スポーツ方法I」については、語学とも足並みを合わせて、F評価の者だけに上書き再履修を認めることにしたが、それに加えて2012年度から、「スポーツ方法II」の履修撤回を認めることにした。

2. 2012年度の基本方針

(1) 引き続き、早川後任人事の実現に向けて取り組む。

(2) 全学共通教育、学部、大学院それぞれの講義科目の再編成に向けて引き続き検討し、具体化を進める。

(3) スポーツ方法の開講形態、内容、方法、評価、アンケート調査等について引き続き検討し、改革をはかる。

(4) 「課外活動施設等検討ワーキンググループ」を通して、体育館の増改築を含めたスポーツエリアの整備・充実について、より具体的なプラン(概算要求によらない予算措置の可能性等も含む)を作っていくこと、およびそれに向けた情報収集や調査活動を開始する。

(5) 熱中症対策や休日の授業における事故対策、AEDの学生への周知方法等をふくめて、安

全安心な教育環境の整備に向けて、関係部署との協議等を進めていくとともに授業での具体化について検討を進める。

- (6) 引き続き、長期欠席者・見学者の実態把握につとめ、関係部署と連携し、対策を検討する。
- (7) GPA 制度の本格導入にともなう学生の履修行動の変化等についての実態把握につとめる。
- (8) ポスターやホームページ、入試説明会等を通して、大学院および大学院入学試験に関する情報発信に努める。

3. 2012 年度のカリキュラム編成と体制

<開講コマ：全学共通教育>

全学共通教育科目における運動文化科目の開講コマ数は、通年コマに換算して 44.5 コマ。

	2012 年度		2011 年度	
全学共通教育開講コマ	44.5	通年コマ	45	通年コマ
・方法Ⅰ	30	通年コマ	30	通年コマ
・方法Ⅱ	21	半年コマ	21	半年コマ
・健康・スポーツ科学	5	半年コマ	6	半年コマ
・教養ゼミ	3	半年コマ	3	半年コマ

<体制>

- ・ 専任は、引き続き早川後任の採用がなく、6 人の体制となる。
- ・ 専任担当総コマ数は 17 コマとなる。
- ・ 助手が 2 名体制から〈1 名＋パート職員（週 30 時間）〉体制となる。パート職員の方の勤務は、8 時半～15 時半（昼休み 1 時間）とする。
- ・ 非常勤担当コマ総数は昨年度と同様の 27.5 コマとなった。運動文化科目開講コマ数に占める非常勤担当コマの割合は 61.8%である。

<種目別 2012 年度開講コマ数>

	スポーツ方法Ⅰ＝通年		スポーツ方法Ⅱ＝半年	
	2012 年度	2011 年度	2012 年度	2011 年度
テニス	7	8	8	6
バスケットボール	2	2	2	2
バドミントン	5	5	3	2
サッカー	3	3	1	2
バレーボール	3	3	—	-
ソフトボール	2	2	—	-
ジャズダンス	1	2	—	-
フライングディスク	3	2	2	2
スポーツフィットネス	1	1	—	-
オルタナティブスポーツ	1	1	—	-

体操	—	-	—	-
ゴルフ	—	-	2	2
古武術	—	-	1	1
ジョギング	—	-	—	1
ウォーキング	—	-	1	1
ウォーキング&ジョギング	1	-	—	-
野球	—	-	—	-
ソフトラクロス	—	-	—	2
卓球	—	-	1	-
療育コース	1	1	—	-
	30	30	21	21

<2012年度の特徴>

- ・ スポーツ方法Ⅰでは、フライングディスクが2から3に増、テニスが8から7に、ジャズダンスが2から1に減、ウォーキング&ジョギングを1新設した。
- ・ スポーツ方法Ⅱでは、テニスが6から8に、バドミントンが2から3に増、サッカーが2から1に、ソフトラクロスが2から0に、ジョギングが1から0に減、卓球を1新設した。
- ・ 種目定員を、スポーツ方法Ⅱのバスケットボールで32から40名に、バドミントンを32から36名に、古武術を20から25名に、ウォーキングを30から25名に変更した。
- ・ 非常勤講師担当種目は、種目調整により変更（菊地：方法Ⅰ・ソフトボールからフライングディスクに）、開講科目調整等により変更（森：方法Ⅰ・テニスから方法Ⅱ・夏、冬・テニスに、新村：方法Ⅰ・バドミントンから方法Ⅱ・夏、冬・バドミントンに）を依頼した。渡辺氏の後任として新規非常勤講師射手矢氏にスポーツ科学・健康科学（運動と体力の科学）を依頼した。
- ・ スポーツ科学・健康科学は、6から5コマに、教養ゼミは昨年度同様、3コマとなる。
- ・ 昨年度と同様、月曜日が非常勤講師のみの授業日（実技科目）となる。

4. 教育条件の整備・拡充

運動文化科としては、西キャンパスを含めた総合的な整備を考慮した上で、課外活動施設等検討ワーキンググループ（岡本担当）に対して提案を行っていくこと、また、担当副学長との情報および意見交換が求められる。

5. 運動施設利用に関する関係クラブ・サークルとの調整

例年通り、次年度カリキュラム編成期に、副学長主催で関係クラブ・サークルとの調整を行う。学生支援課と連携を密にし、課外活動団体と良好な関係を保ちながら情報を収集し、施設改善のためにもいっそうの充実を図る。学生担当副学長の出席は毎回要請する。

6. カリキュラム開発・教育方法改善のための調査、研究

とくに昨年度の調査結果を検討するとともに、従来からの検討結果を再整理して資料とする。
実践交流会を開催して、教育方法改善のために活用する。

7. 教育部の活動

(1) 行事の開催

- ①教育部会の定期的開催
- ②新年度顔合わせ会
- ③実践交流会の開催（予定）6月： 10月：
- ④施設整備関係部署との交流
- ⑤教育活動の年度末総括

(2) 調査活動

「スポーツ方法Ⅰ」の満足度と「スポーツ方法Ⅱ」の受講希望調査（冬学期末）
「スポーツ方法Ⅱ」の満足度調査（夏・冬学期末）

(3) 資料・調査報告書・研究成果等の発行

「われわれの教育活動」の刊行
施設整備・改善のための基礎資料の作成

(4) 2012 度 教育部関係日程（案）

4月	2日（月）	新年度顔合わせ会（入学式）
月	日（ ）	実践交流会 1
月	日（ ）	実践交流会 2
月	日（ ）	教育活動の総括・方針検討会議
月	日（ ）	年度末懇親会